

『みこころにかなった結婚・2』

'21/01/31

聖書箇所：新約聖書から随所

先週の礼拝で、私たちは、主に旧約聖書から、神様のみこころにかなった結婚というのが、具体的にどういったようなものであるか？ということ学びました。…と言いますのも、現在、私たちの教会だけでなく…、多くの教会で、「みこころにかなって“いない”結婚」というものが蔓延してしまっているために、多くの人たちが、そのせいで、余計な混乱や様々な問題を、その身に招いてしまっているからです。

だから、私たちは、本当に、天の神様が教え…、また、祝福して下さる結婚というものを知っていかないといけないし…、そういったことを実践できるよう、皆で祈りつつ…、力を合わせて協力していかないとけないのです！正直、先週に続いて、今日もまた、かなり厳しいことを話す予定ですが、どうか、皆さんには、私が何を言っているか？ではなくて…、果たして、聖書のみことばがどう教えてくれているのか？神様のみこころが、どういったところにあるのか？ということに、皆さんの思いを集中していただきたいと思ひます…。

命題：主のみこころにかなった結婚とは、どのようなものでしょうか？

先週も言いましたように、本当は、このメッセージは1回で終わる予定でした。しかし、学びを進めていく内に、どうしても、1回ではすまなくなって、今日に至りました。先週は、どちらかと言うと、聖書全体と言うよりも、旧約聖書から、主に、当時のユダヤ人たちが結婚ということに関して、どのように教えられていたのか？ということについて学びましたが、それは、私たちクリスチャンからすると、言わば“前振り”と言うか、「予備知識」のような内容でした…。

そこで、今日は、主に新約聖書のみことばから、神がユダヤ人たち“ではなくて”…、私たちクリスチャンたちの結婚に対して願っておられることをテーマに学んでいきたいと思います。そうすることによって、願わくは、今日このメッセージを聴いてくださった皆さんが、結婚という「人生の分岐点」におきましても、神様のみこころに沿っていくことができ、それこそ、素晴らしいクリスチャンホームを築いていってくださることを願うものです。

I・神が、“ふさわしい 助け手”を与えてくださる！（創世記 2:18-24）

まずは、先週の礼拝を聞いていなかった皆さんのため…、また、今回の学びの予備知識として、先週に学んだことを簡単に復習していきましょう。聖書のみことばは、創世記 2:18-24 です。このみことばは、**神が、最初の人間であったアダムに対して、“ふさわしい助け手”を与えてくださった！**ということが記されています。…そこには、こう記されています。

18 神である【主】は仰せられた。「人が、ひとりであるのは良くない。わたしは彼のために、彼にふさわしい助け手を造ろう。」

19 神である【主】は土からあらゆる野の獣と、あらゆる空の鳥を形造り、それにどんな名を彼がつけるかを見るために、人のところに連れて来られた。人が生き物につける名はみな、それがその名となった。

20 人はすべての家畜、空の鳥、野のあらゆる獣に名をつけた。しかし人には、ふさわしい助け手が見つからなかった。

21 神である【主】は深い眠りをその人に下されたので、彼は眠った。そして、彼のあばら骨の一つを取り、そのところの肉をふさがれた。

22 神である【主】は、人から取ったあばら骨をひとりの女に造り上げ、その女を人のところに連れて来られた。

23 人は言った。「これこそ、今や、私の骨からの骨、私の肉からの肉。これを女と名づけよう。これは男から取られたのだから。」

24 それゆえ男はその父母を離れ、妻と結び合い、ふたりは一体となるのである。

今読んだ部分は、私たちが結婚ということ語る上で、かなり重要なみことばであります…。しかし、今日は、時間の関係もあって、このことに注目してください。天の神様が、当時、アダムが1人きりであったことが『**良くない…**』ということで、そのアダムに対して、エバを与えてくださったということです。…勿論、この時点では、まだ女性が存在していなかったわけで、今の私たちとは、かなり状況が違います。

でも、どうか皆さん、神様の御気持ちと言うか、神様の御性質というものについて考えてみてください。…果たして、天の神様は、良くないことを良くないままで…、そのまま放っておかれるような御方でしょうか？⇒当然、答えは NO です！天の神様は、間違いなく、私やあなたの必要を満たして下さいます！もし、それが、本当に“必要”であるなら…。そうでしょ？

先週学んだように、結婚という制度は、天の神様が私たち人間に与えてくださったもので…、私たち人間が何かの必要に迫られて作り上げていった制度でも、あるいは、長い歴史や文化によって構築されていったようなシステムでもありません。今、夫婦間の不仲や不倫の問題、あるいは、少子化問題などが取りざたされておりますし、また、世界中で結婚という制度に固執しない若者たちが増えていっているのは、私たち人間の罪が問題なのであって、決して、結婚という制度そのものに問題があるから、ではありません。私たちは今一度、聖書のみことばに立ち返って…、神様のみこころを真剣に探り求めていくべきではないでしょうか？

II・神に選ばれた者は、“**聖なる民**”であるから！（申命記 7:1-6）

その次、私たちは、申命記 7 章のみことばに目を向けました。そのみことばは、神様から選ばれた、**あのイスラエルの民たちが、“聖なる民”である！**ということで、神様から特別な期待を寄せられていたことが分かります。申命記 7:1-6 のみことばには、こう記されています。

- 1 あなたが、入って行って、所有しようとしている地に、あなたの神、【主】が、あなたを導き入れられるとき、主は、多くの異邦の民、すなわちヘテ人、ギルガシ人、エモリ人、カナン人、ペリジ人、ヒビ人、およびエブス人の、これらあなたよりも数多く、また強い七つの異邦の民を、あなたの前から追い払われる。
- 2 あなたの神、【主】は、彼らをあなたに渡し、あなたがこれを打つとき、あなたは彼らを聖絶しなければならぬ。彼らと何の契約も結んではならぬ。容赦してはならぬ。
- 3 また、彼らと互いに縁を結んではならぬ。あなたの娘を彼の息子に与えてはならぬ。彼の娘をあなたの息子にめとってはならぬ。
- 4 彼はあなたの息子を私から引き離すであろう。彼らがほかの神々に仕えるなら、【主】の怒りがあなたがたに向かって燃え上がり、主はあなたをたちどころに根絶やしにしてしまわれる。
- 5 むしろ彼らに対して、このようにしなければならぬ。彼らの祭壇を打ちこわし、石の柱を打ち砕き、彼らのアシェラ像を切り倒し、彼らの彫像を火で焼かなければならぬ。
- 6 あなたは、あなたの神、【主】の聖なる民だからである。あなたの神、【主】は、地の面のすべての国々の民のうちから、あなたを選んでご自分の宝の民とされた。

このみことばは、神様から選ばれたイスラエルの民たちが、いよいよ、約束の地であるカナンに入っていくとする…、その時、神様がアブラハムの子孫であるユダヤ人たちに対して、注意 & 警告された内容について記されておりました。ここを読んでくださったら分かる通り、天の神様は、イスラエルが約束の地力

ナンに入っていくに当たって、そのカナンに住んでいる先住民を聖絶…、つまり、神の名のもとに滅ぼすべきであって、どんな契約も…、まして、結婚などの関係を持つてはならない！ということをお教えしておられます。

しかし、残念ながら、この後、イスラエルは、神様のみこころに逆らって、様々な問題を引き起こしてしまいました…。皆さんも、ご存知でしょ？イスラエルが北と南に分裂してしまった1番の原因は何でした？⇒それはイスラエルが神様に背いて、雑婚を繰り返したり、偶像の神々を拝んだりしたからでした。

ここで、神様が嘆いておられる旧約聖書のみことばを1ヶ所紹介させていただきます。エゼキエル 20:15-24 には、こんな神様のお言葉が記されています、『15 だが、わたしは、わたしが与えた、乳と蜜の流れる地、どの地よりも麗しい地に彼らを導き入れないと荒野で彼らに誓った。16 それは、彼らがわたしの定めをないがしろにし、わたしのおきてを踏み行わず、わたしの安息日を汚したからだ。それほど彼らの心は偶像を慕っていた。17 それでも、わたしは彼らを惜しんで、滅ぼさず、わたしは荒野で彼らを絶やさなかった。18 わたしは彼らの子どもたちに荒野で言った。『あなたがたの父たちのおきてに従って歩みな。彼らのならわしを守るな。彼らの偶像で身を汚すな。19 わたしがあなたがたの神、【主】である。わたしのおきてに従って歩み、わたしの定めを守り行え。20 また、わたしの安息日をきよく保て。これをわたしとあなたがたの間のしるしとし、わたしがあなたがたの神、【主】であることを知れ』と。21 それなのに、その子どもたちはわたしに逆らい、わたしのおきてに従って歩まず、それを行えば生きることのできるそのわたしの定めを守り行わず、わたしの安息日を汚した。だから、わたしは、荒野でわたしの憤りを彼らの上に注ぎ、彼らへのわたしの怒りを全うしようと思った。22 しかし、わたしは手を引いて、わたしの名のために、彼らを連れ出すのを見ていた諸国の民の目の前でわたしの名を汚そうとはしなかった。23 だが、わたしは、彼らを諸国の民の中に散らし、国々へ追い散らすと荒野で彼らに誓った。24 彼らがわたしの定めを行わず、わたしのおきてをないがしろにし、わたしの安息日を汚し、彼らの心が父たちの偶像を慕ったからだ。』

⇒皆さん、分かってくださいますか？…天の神様は、最初から何度も、偶像、…つまり、石や木で作られた偽物の神々を警戒するよう、教えてくださっていました。…なのに、その必要なアドバイスに、イスラエルは従おうとはしなかったのです！

皆さん、覚えてくださっていますか？…モーセが、あのシナイ山で神様から律法を授かっていた時、イスラエルの民たちは、そのふもとで何をしていました？⇒何と、彼らは、金の子牛の偶像を作って、淫らな…、不品行の罪に陥っていたのです。いえ…、それだけではありません。民数記 25 章を見ますと、当時、イスラエルの民たちが、「バアル・ペオル」という偶像の神を拝んだことが記されています。当時、その神をイスラエルに招き入れてしまったのは、異教の地、モアブの娘たちでありました…。

また、私にとって印象深いのは、I 列王記 18 章に記されてある…、あの預言者エリヤがカルメル山でバアルの預言者やアシエラの預言者たちと戦ったことです。当時、イスラエルには、何百人という、偶像に仕える預言者たちが居ただけじゃない…。悲しいことに、イスラエルの多くの民たちが、真の神様と偶像の神々との間で、『どっちつかず』（I 列王記 18:21）になってしまっていたわけでしょ？

そのように、神様から選ばれたはずのイスラエルでさえ、自分たちを導いてくれた真の神様から離れて、石や木で作られた“だけ”の偶像に心を奪われてしまっていたのです。…一体、どれほど、私たち人間というものには愚かな生き物なのでしょう？…でも、だからこそ！天の神様は、イスラエルに対して、何度も何度も…、厳しく、偶像礼拝に気を付けるべきこと…、特に、異教の民たちと関係を持たないように、注意&警告して下さっていたのです。…でも、残念なことに、イスラエルの民たちは、その神様からの期待に十分には応えられませんでした…。そういったことが、先週の礼拝で学んだ内容であります。

III・主なる神によって、救われたがゆえに！（II コリント 6:14-18）

どうぞ、今度は、II コリント 6:14-18 をご覧くださいますか？ここでは、私たちクリスチャンは、神様によって、大きく変えられたのだ！という話がなされています。私たちは、主なる神様によって…、神の恵みによって、“救われた”のです！…ここ II コリント 6:14-18 では、そういったことが教えられています。

- 14 不信者と、つり合わぬくびきをいっしょにつけてはいけません。正義と不法とに、どんなつながりがあるでしょう。光と暗やみとに、どんな交わりがあるでしょう。
- 15 キリストとベリアルとに、何の調和があるでしょう。信者と不信者とに、何のかかりがあるでしょう。
- 16 神の宮と偶像とに、何の一致があるでしょう。私たちは生ける神の宮なのです。神はこう言われました。「わたしは彼らの間に住み、また歩む。わたしは彼らの神となり、彼らはわたしの民となる。
- 17 それゆえ、彼らの中から出て行き、彼らと分離せよ、と主は言われる。汚れたものに触れないようにせよ。そうすれば、わたしはあなたがたを受け入れ、
- 18 わたしはあなたがたの父となり、あなたがたはわたしの息子、娘となる、と全能の主が言われる。」

●救われた者の 生き方！

多分、皆さんもご存知だと思います。この当時、コリント教会には、たくさん問題や誤解があって、教会全体が混乱しておりました。だから、コリント教会は、パウロに対して、たくさんの質問を送って、その指示を仰いだのです。…このみことばは、よく結婚に関する指示や注意点として引用されることが多いみことばです。しかし、このみことばは、結婚について教えてくれているわけではありません。救われたクリスチャンとそうではない不信者との“違い”について、端的に説明してくれているのです。でも、先週私たちが学んだように、結婚ほど、真剣で…、深い人間関係というものはありませんよね？

確かに、このみことばが教えてくれているように、私たちクリスチャンと、信仰を持っておられない方々とは、いろんな点で大きく違います。少し前の II コリント 5:17 のみことばが、『だれでもキリストのうちにあるなら、その人は新しく造られた者です。古いものは過ぎ去って、見よ、すべてが新しくなりました。』と教えてくれているように、イエス・キリストを信じる信仰は、私たちのことを大きく変えてくれました。…だから、私たちクリスチャンと、そうではない方々とは、いろんな点で、噛み合わない…、分り合えない点があるのです。もしも、「私は、信仰を持って以降も、ほとんど変わっていない…」とおっしゃる方がいるなら、それは、この聖書が教える信仰や救いとは違います。だって、この聖書のみことばが教える信仰とは、私たちの価値観や生き方や…、生きる目的も皆、変えてしまうような…大きなターニングポイントであるからです。

このみことばが教えてくれていますのは、実に、そういったことです。…と言いますのも、私たちクリスチャンは、神様のことを一番に愛して…、できることならば、その神様に喜ばれることだけ…、神様の素晴らしさを現わすことだけ…、つまり、神様の目から見た正義だけ追及したいと願っております。そうでしょ？…しかし、真の神様のことを知らない方々は、そうではありません。正直な話、私は、信仰を持つまで、神様の前に正しいのかどうかなんて、ほとんど考えたことがありませんでした…。

また、この聖書のみことばは、真の神様だけが光で…、私たちクリスチャンは、その神様の偉大さを反射させる…、まるで鏡のような存在であるということをお教えしてくれています。しかし、まだ、その神様のことを知らない者たちは、暗闇の中におり、そのやみの中を歩んでいると教えています（I ヨハネ 2:8-11）。

ここ 15 節で教えられている『ベリアル』というのは、ヘブル語では、「悪い者、よこしまな者…」という意味の言葉ですが、ここでは、明らかに、悪魔であるサタンのことを指しています。エペソ 2 章や I ヨハネ 3 章のみことばが教えてくれているように、真の神様のことを知らない方々は皆、好むと好まざるとに関わらず、悪魔の側の陣営に居て…、悪魔の片棒を担がされてしまっているということをお教えしています。

私たちクリスチャンと、そうでない方たちとは、そのような関係にあります。…だから、このみことばでも、17節以降、『それゆえ、彼らの中から出て行き、彼らと分離せよ、と主は言われる。汚れたものに触れないようにせよ。そうすれば、わたしはあなたがたを受け入れ、わたしはあなたがたの父となり、あなたがたはわたしの息子、娘となる、と全能の主が言われる。』と教えるわけです。ここで、『分離せよ！』と訳されているギリシア語の言葉(ἀφορίζω)は、「分離する(以外には)、わけ、区別する、引き離す、締め出す、えり分ける…」というような意味があります。つまりは、誰と、どのような付き合い方をするか、よくよく考えなさい！というわけです。

パウロは、この手紙の前に、こんなことを同じコリント教会に書き送っています。Iコリント 5:9-13、『9 私は前にあなたがたに送った手紙で、不品行な者たちと交際しないようにと書きました。10 それは、世の中の不品行な者、貪欲な者、略奪する者、偶像を礼拝する者と全然交際しないようにという意味ではありません。もしそうだとしたら、この世界から出て行かなければならないでしょう。11 私が書いたことのほんとうの意味は、もし、兄弟と呼ばれる者で、しかも不品行な者、貪欲な者、偶像を礼拝する者、人をそしめる者、酒に酔う者、略奪する者がいたなら、そのような者とはつきあってはいけなく、いっしょに食事をしてもいけない、ということです。12 外部の人たちをさばくことは、私のすべきことでしょうか。あなたがたがさばくべき者は、内部の人たちではありませんか。13 外部の人たちは、神がおさばきになります。その悪い人をあなたがたの中から除きなさい。』

→このように、パウロは、教会の中にいる、クリスチャンと呼ばれる者たちの中で、特定の罪を犯し続ける者たちと交際をしないよう…、つまり、「教会として処分をせよ！」ということをおっしゃっています。これが、時々言われる、「教会戒規³」と言われているものです。ここだけではなく、マタイ 18 章でもイエス様が教えてくださっているように、私たちは、誰とどのような付き合いをするか？何を目的に行動するか？果たして、それが神様のみことばであるかどうか？神様の栄光に繋がるかどうか？ということなどを、よく考えないといけないのです！

ここ 14 節で言われている『くびき』とは、農作業などをする家畜たちを繋ぐ道具のことです。…例えば、皆さんは、何か、大きなことを始めようとする時、それを始める目的や方向性が全く違う人たちと一緒に始められますか？…例えば、ある人は神様を賛美するための賛美歌を歌いたい…、別の人は若者に人気のある POP を歌いたい…、また、別の人はクラシックを極めたい…。果たして、そんなことで、皆がまとまるでしょうか？…そのように、私たちは、どのような相手と、どのような関係を築いていくか、どこまでの関係を持つていくのか？ということ、しっかりと考えないと、その先へ進めないのです。

●結婚(再婚)に関する みことば

どうか、今度は、できましたら、Iコリント 7:32-40 のみことばをご覧ください。ここでは、クリスチャンの結婚や再婚について、教えられています。『32 あなたがたが思い煩わないことを私は望んでいます。独身の男は、どうしたら主に喜ばれるかと、主のことに心を配ります。33 しかし、結婚した男は、どうしたら主に喜ばれるかと世のことに心を配り、34 心が分かれるのです。独身の女や処女は、身もたましいも聖くなるため、主のことに心を配りますが、結婚した女は、どうしたら主に喜ばれるかと、世のことに心を配ります。35 ですが、私がこう言っているのは、あなたがた自身の益のためであって、あなたがたを束縛しようとしているわけではありません。むしろあなたがたが秩序ある生活を送って、ひたすら主に奉仕できるためなのです。36 もし、処女である自分の娘の婚期も過ぎようとしていて、そのままでは、娘に対しての扱い

方が正しくないと思ひ、またやむをえないことがあるならば、その人は、その心のままにいなさい。罪を犯すわけではありません。彼らに結婚させなさい。37 しかし、もし心のうちに堅く決意しており、ほかに強いられる事情もなく、また自分の思うとおりに行くことのできる人が、処女である自分の娘をそのままにしておくのなら、そのことはつばです。38 ですから、処女である自分の娘を結婚させる人は良いことをしているのであり、また結婚させない人は、もっと良いことをしているのです。39 妻は夫が生きている間は夫に縛られています。しかし、もし夫が死んだなら、自分の願う人と結婚する自由があります。ただ主にあってのみ、そうなのです。40 私の意見では、もしそのままにいられたら、そのほうがもっと幸いです。私も、神の御霊をいただいていると思います。』

すみません。今日は、時間の関係もあって、駆け足で幾つかのみことばを見ていっているので、ゆっくりと、聖書のみことばを観察できていません…。先程も言いましたように、ここでは、クリスチャンの結婚と再婚について教えられています。…と言いますのも、コリント教会が、クリスチャンが考えるべき結婚についても、パウロに質問をしたからです。

このみことばを注意深く読んでくださったなら分かる通り、このみことばは、クリスチャンの親の視点で、果たして、自分の子どもを結婚させるべきかどうか、ということをおっしゃっています。しかし、その結論は、簡単に言うと、結婚させても結婚させなくても良い！というものです。…時々、この世との関係を絶って、独身を貫くことは何よりも尊いことである！と考へて、結婚するよりも独身でいることの方が尊いのだ！という風に教えるキリスト教のグループがありますが、そういったことを決して聖書のみことばは教えていないと思います。しかし、このみことば(特に前半)でもおっしゃっているのは、要は、神様に奉仕できるかどうか、言い換えれば、神様の栄光に繋がるかどうか、ということをお判断の基準にすべきだと、おっしゃっています。それこそが、唯一の判断基準なのです。

でも、皆さん、不思議に思われませんか？…どうして、このみことばは、親が子どもを結婚させるかどうかの視点で書かれていて…、肝心の青年目線と言うか、「あなたは、こう判断しなさい！」というような視点で書かれていないのでしょうか？

→それは、この当時、ほとんどの結婚というものは、その親たちが決めていたからです。多分、皆さんは、よくご存知だと思います。例えば、信仰の父アブラハムは、自分が愛するイサクが結婚するに当たって、どうしましたか？…アブラハムは、自分の息子イサクの結婚相手を決めるために、「このカナンの地から選んではならない！」と言って、自分の全財産などを任せていた最年長のしもべを選んで、そのしもべに、自分の生まれ故郷から、イサクの妻となる人物を探して来るように、神様への誓いをもって送り出すのです。

そのように、旧約聖書を見ると、そこに記されてある結婚のほとんどは親たちが決めるべきものでした。多分、それは新約聖書の時代でもあまり変わっていません。だから、このみことばでも、結婚前の若者たちへのアドバイスではなく…、その親たちを対象に、結婚に関してアドバイスされてあるのです。…このことは決して、良いか悪いかということではありませんが、実は、この当時、ユダヤでは、男子は18歳前後、女性たちは16歳ほどで結婚していったそうです。現代で言えば、まだ、中学生とか高校生の年代です。…そんな彼らが、自分の結婚相手を、責任をもって、自由に決められたと思いますか？⇒いいえ！だから、聖書の中には、結婚に関する直接的な教えが少ないのです。

ただ、どうぞ、この 39 節をご覧ください。そこには、夫が亡くなってしまった場合を想定して、こうおっしゃられています。『妻は夫が生きている間は夫に縛られています。しかし、もし夫が死んだなら、自分の願う人と結婚する自由があります。ただ主にあってのみ、そうなのです。』⇒皆さん、気付いてくださいましたか？ここで、パウロは、もしも、夫と死別した妻が再婚するなら、その相手はクリスチャンだけだ！という風に教えています。この、『ただ主にあってのみ、そうなのです』という言葉は、そういったことを意味しているのです。

³ 教会戒規: マタイ 18:15-20 も参照すべき。その動機は愛であり、その目的は、その人のたましいが救われること。

でも、皆さん、思いませんか？…再婚する場合に、クリスチャンとしか結婚できない！すべきでない！と教えるのなら、当然、最初の結婚だってそうじゃありません？…どうぞ、今度は、最後に、結婚した夫婦をターゲットに教えられてあるみことばである、エペソ 5 章を開けてみてください

IV・イエス様の模範を实践しようとするがゆえ！（エペソ 5:22-33）

このみことばは、明らかに、結婚した夫婦のことを想定して…、その妻に対して、また、夫に対してのメッセージが語られています。よく、結婚式のメッセージで、I コリント 13 章から、愛についてメッセージされる場合がありますが、あそこのみことばは、夫婦間や男女間ということではなくて…、もっと広い意味の愛について教えてはいますが、このみことばは、そうではなく…、明らかに、結婚したカップルを想定して、書かれています。

このみことばが教えてくれていることを簡単に言うと、あのイエス様を“模範”としなさい！ということ。そういって、最後に確認していきましょう。エペソ 5:22-33 には、こう記されています。

- 22 妻たちよ。あなたがたは、主に従うように、自分の夫に従いなさい。
- 23 なぜなら、キリストは教会のかしらであって、ご自身がそのからだの救い主であられるように、夫は妻のかしらであるからです。
- 24 教会がキリストに従うように、妻も、すべてのことにおいて、夫に従うべきです。
- 25 夫たちよ。キリストが教会を愛し、教会のためにご自身をささげられたように、あなたがたも、自分の妻を愛しなさい。
- 26 キリストがそうされたのは、みことばにより、水の洗いをもち、教会をきよめて聖なるものとするためであり、
- 27 ご自身で、しみや、しわや、そのようなものの何一つない、聖く傷のないものとなった栄光の教会を、ご自分の前に立たせるためです。
- 28 そのように、夫も自分の妻を自分のからだのように愛さなければなりません。自分の妻を愛する者は自分を愛しているのです。
- 29 だれも自分の身を憎んだ者はいません。かえって、これを養い育てます。それはキリストが教会をそうされたのと同じです。
- 30 私たちはキリストのからだの部分だからです。
- 31 「それゆえ、人は父と母を離れ、その妻と結ばれ、ふたりは一体となる。」
- 32 この奥義は偉大です。私は、キリストと教会とをさして言っているのです。
- 33 それはそうとして、あなたがたも、おのおの自分の妻を自分と同様に愛しなさい。妻もまた自分の夫を敬いなさい。

●結婚の理想 モデル＝キリストと教会

このみことばは、結婚した男女間…、つまり、夫婦の関係というものの、理想の“モデル”が、それはまるで、イエス・キリストと教会との関係と同じである！ということを教えてくれています。そうでしょ？…でも、皆さん、どう思われます？果たして、本当の意味で、イエス様のことを知らない夫が、そのイエス様を模範として、その妻のことを愛することができるものなのでしょうか？…また、イエス様のことを知らない妻が、まるで、教会がキリストに従うが如く、その夫に従うことができると思います？…できないじゃないですか！なのに、どうして、ある人たちは、わざわざ、クリスチャンでない人を結婚相手に選ぶのでしょうか？

前回も言いましたように、結婚生活は大変です。…それは、いくら愛し合った男女間でも同じです。だって、現代では、結婚したカップルの内、3組に1組が離婚している、と言われるような時代でしょ？

の地上のどこにも、完全な人間は居ないわけで、私たち人間は皆、罪人で、愚かで、感情的で、絶対に、たくさん間違いを起こすのです。そうでしょ？…しかも、私たち人間の感情は移ろい易いものです。私たちを取り巻く状況だって…、あるいは、私たちの見映えだって、好みだって変わっていきますでしょ？…正直、私は、結婚して30年近く経った今でも、妻に対する感情的な部分はあまり変わっていないように思いますけれども、そんな人間はほとんど居りません(笑)。

じゃあ、私たちは、どうすれば良いのでしょうか？…神様の祝福を求めて、神様のみこころ(≡みことば)に従っていくしかないじゃないですか！…じゃあ、果たして、あなたは、神様の祝福を求めて、神様のみことばである聖書を学んでおられますか？果たして、あなたは、キリストの愛を実践していくために、イエス様のことをよく学んでおられるのでしょうか？…と言いますのは、私たちが、肝心のイエス様のことを知らないで、どうやって、イエス様の模範に倣っていくことができるのでしょうか？

<励ましの言葉>

申し訳ありません…。今日はもう時間の関係もあって、このみことばを詳しく見ていくことができません。できれば、また、別の機会に学んでいきたいと思います。…でも、どうか、皆さん、先程学んだ、I コリント 7 章のみことばを思い出してください。…そこには、こう教えられてありました。『**ですが、私がこう言っているのは、あなたがた自身の益のためであって、あなたがたを束縛しようとしているものではありません。**…』(I コリント 7:35)って…。このように、結婚に関するアドバイスも、また、その他の命令や戒めも、すべては、私や皆さんの益…、つまりは、祝福のためであって、ひいては、私たちの幸せに繋がっていくのです。

皆さん、先週の話覚えてくださっていると思います。でも、先週の言い方では、あまりよく、私の意図が伝わってなかったみたいなので、もう1度、説明させてください。…私たちの教会は、今から 10 年程前、ある物件を買うかどうかの選択を迫られました。しかし、その物件は先客が居て、買えませんでした。しかし、まず間違いなく、私たちは、その物件を買っていても、十分に感謝できていたと思います。

でも、先週も話したように、もし、その物件を買っていたら、私たちは、確実に、今の教会堂を見ることができませんでした。もしも、皆さんが、その物件と今の教会堂を選ぶことができたなら、どちらを選びます？正直言って、私なら、絶対に今の物件です！…多分、私が思いますのは、ほとんどの方が、私と同じ判断をされるように思います。

しかし、現実には、そのように…、私たちは2つの選択肢を横に並べて、選ぶなんて普通はできません！…一方を選んでしまったら、選ばなかった…、もう一方の選択肢のことを…、私たちは、その片鱗さえ知ることができません。そうでしょ！…でも、だからこそ、私たちは、聖書のみことばに…、神様のみこころを1番に従っていくべきなのです。

今日、私が皆さんにお勧めしたいことは、もし今日、このメッセージを独身のクリスチャンの方が聴いてくださっていたら、どうか、結婚するに当たって、クリスチャンかノンクリスチャンかではなくて…、まず、1番に、神様が喜んでくださることは何か？どうすることが、神様のみこころに合っているか？ということを考えていただきたい！ということです。

先週も話したように、私が話した…、ほとんどすべての若者たちは、「できることなら、クリスチャンと結婚したいと思っています」と言ってくれていました。恐らく、それこそが、クリスチャンの“自然な願望”なのでしょう。でも、多くの人たちは、いつの間にか、そういった夢を諦めて…、クリスチャンでない方たちと結婚してしまいました。I コリント 10:31 のみことばは、こう教えます。『**こういうわけで、あなたがたは、食べるにも、飲むにも、何をすることも、ただ神の栄光を現すためにしなさい。**』って…。結婚とは、私たちが何を食べるか、何を飲むかとは比べ物にならないほど、大切な…、あなたの一生を左右する選択です。だからこそ、どうか、自分の一時的な感情に振り回されることなく…、神様のみこころに従って、自分が結婚すべきかどうか？神様に喜ばれるパートナーかどうか？を考えていただきたいと思います。…最後に、お祈りを～